

青空を見上げて

さくら ゆき

江戸時代に宿場として使われていた場所にあった、さる豪農のお屋敷を見に行ったことがある。現代に至るまで手入れが行き届いていて、大人一人では腕を回せないほど太い柱や鴨居が艶光りしていた。美しい透かし彫りや見事な式台、茶道具、火鉢。様々な道具も残され、展示してあった。手を触れるなど注意書きを出したり、スタンプで区切る訳でもなく。惜しげもなく触れられる状態で、襖や掛け軸もそのまま残してあり、とても興味深かった。

中でも私が興味を惹かれたのは、釘隠しだ。客間の釘隠しには、番いの兎が象られていた。

兎がよく子どもを産み増えることから、子宝に恵まれる縁起物として扱われているのは知っていた。だから、釘隠しに兎がデザインされていることには然程驚かなかった。驚いたのは、その隣の部屋の釘隠しが蝙蝠だったことだ。

現代人は、吸血鬼のイメージのせい、蝙蝠に対して不気味な印象を抱く人が多いのではないかと思う。実際に血を吸う蝙蝠は少なく、果実や虫を食べているにも関わらずだ。黒く翼のある姿で、闇を好み、血を求めて飛び回る、悪魔の手先のような暗いイメージ。そんな蝙蝠が何故インテリアとして釘隠しにデザインされているのだろうか。

係の方に伺うと、

「蝙蝠は転じて子守となるので、縁起物として釘隠しに使われているのです」

との説明を受けた。

言われて見れば、前にも南天が難を転じるというので、鏡に彫られていたアンティークを見たことがある。縁起をかついた上に見た目にも美しいデザインは、当時の日本にはよく見られたものなのだろう。勿論蝙蝠も、釘隠しだけではなく着物や小物など様々なものにデザインされていたそう。

着物と言えば、私の母は、和裁の出来る人だった。母も、母譲りで私も、背が小さくて既成の洋服でサイズが合うものを探すのは難しかった。しかし着物は、お端折で調節することが出来る。洋服のように何枚も型紙を使い曲線に布を裁つのではなく、直線で裁つので、無駄になっってしまう布が殆ど無い。母の着物を私の着物に仕立て直したり、布を継ぎ足したり、解いて帯にしたり、巾着にしたり。座布団のカバーや人形の服になることもあった。

「手間暇をかければいつまでもずっと使えるのよ」

と、彼女は言っていた。小さな端切れに香を焚き込めて文香にしたり、髪飾りにしたり。アイディアと手間暇で、ひとつの古い着物は時に形を変えつつも、ずっと私の傍にあった。そしてそこにあるのは、ただ物としての価値だけではない。娘に着物を受け継がせた祖母の気持ち。それを大切に母の気持ち。いつか自分もそれを受け継ぎたいと思う私の気持ち。様々な気持ちがこもっていたと思う。

物を大切に、気持ちをこめて、手間暇をかけて。これは着物や釘隠しだけに限らず、和菓子や和食にも、家屋自体にも言えることだ。つまり、日本文化と言い換えることが出来るのだろう。

お客様用の玄関と勝手口が別になっていたり、客用の刺繍が入った豪華な座布団があったり。

上座から掛け軸や窓の外が見えるようになっていて、庭には木々や花や鹿威しに灯籠。冒頭で書いたお屋敷の庭も、やはり広々と美しく、日当たりの良い縁側があった。囲炉裏があり、湯が煮えていて、蒸気が空気を潤し、いつでも好きなときにお茶が飲めるようになっていた。

日本の文化は見目が美しく実用的で、更に、おもてなしや気遣い、恥じらいなどの人の気持ちが籠っている。

今『和柄』が流行しているが、多くは単純で一辺倒な所謂和柄っぽく見える布を、鞆や帽子の一部に貼り付けただけで満足しているデザインが多い。それらも確かに可愛いし、否定するつもりは無いのだが、本来の『和』とは違うものだと思う。

現代の方が時代が進み、様々なものが進歩しているかのように思えるが、実は一概にそうとは言えない。物事のスピードが速くなった分、効率を重んじるあまりに無駄に捨て去る物も増えている。

庭など、洗濯物が干せればいいのかもしれない。手紙など、読めればいいのかもしれない。しかし、庭先に植えられた花、丁寧に刈られた植栽は心を潤す。封筒をあけたとき、良い香りがすると心が和む。

釘隠しひとつひとつにも拘る生活。そこにはお洒落なだけでなく、他者への心遣いが籠っている。元気でいますように。笑っていますように。

生活はただ生きるだけではなく、家は人を収納するだけの箱ではない。細やかな気遣いで人間同士の触れ合いを大切にする、心豊かな生活をお互いに送ることが出来る。小さなインテリアひとつひとつにも拘る自他への心の余裕が持てる生活を、送りたいものだと思う。

香りの記憶

その土地の風土というものがある。そこに住んでいる人にとっては当たり前でごく自然なことでも、外から来た人には新鮮に映ることがある。逆に外から来た人に指摘されて、新鮮に感じることもあるだろう。

外国の人にとって、日本は醤油の匂いがすると言う。海外からの観光客の人たちは、空港を降りてすぐにそう感じるらしい。我々日本人にとっては、中々納得しがたい評価ではないだろうか。町中に醤油の工場があるわけでも、日常なにかと言って醤油を使っているわけでもない。何故そのように外国の人は感じるのだろうか。

ところで、日本の中で私が一番好きなのは、京都の町だ。生まれた町ではあるけれど、今は親しい人が住んでいるわけでもなく故郷とは言い難い。それでも、飛行機や新幹線を降りた瞬間に感じる京都の空気は、とても柔らかい匂いがするのだ。

神社仏閣に立ち上がったときの抹香の匂い。市場を歩いたときの魚や漬物の匂い。

特に京都らしさを感じるのは、町の佇まいと京言葉だろうか。

寺や神社など、歴史ある建物が民家やビルの上に建ち、幼稚園や老人ホームなどに今でも変わらず利用されているものもある。そして柔らかく語りかける京都の言葉。

「ありがとう」が気軽に言える言葉。

東側では、「ありがとう」では馴れ馴れしすぎ、「ありがとうございます」では長すぎる。結果、「すみません」が関の山で、何も言わないことすら多い。それが、この町ではバスを降りる客が運転手に「ありがとう」と言える。言う方が当たり前になり、言われる方も当たり前を受け取り、応える。

物理的な香りだけではなく、こうしたやりとりやそこにある歴史。それに対する意識的、無意識的な誇り。

そうしたことから形作られる風土が、京の香りを感じさせてくれるのだろう。

香りというのは不思議だ。いつまでも覚えていて、同じ香りを嗅ぐ度にその香りと結びついた思い出が脳裏を過ぎる。脳への記憶の仕組み上、そうなっているのはわかっているのだが、そうやってしまうとあまりに夢がないように感じる。

ある時出会った、とても尊敬している人がいる。その人からは、いつもとても良い匂いがした。辺りに漂う香りで、その人が来たことに気付いて振り向くほどだった。

とても良い香りだったので、仲良くなってからなんの香水をつけているのかと本人に訊いてみたことがある。私は教えてもらった香水を買い求めた。

早速つけてみる。確かに、似ている気がする。本人から教えてもらったのだし、この香水に間違いはないはず。なのに、どうも少し違う気がするのだ。

人の香りというのは、香水だけではない。使っているシャンプーの匂い。洗濯の洗剤の匂い。煙草の匂い。部屋に漂う匂いや、いつも行く場所の匂い。さまざまな匂いが服や髪に染み付き、その人の本来の匂いと入り混じってその人特有の芳香を放つ。

時々、同じ香水をつけているのが道ですれ違った人にはっと反応してしまうことがある。鼻腔

をつく香りで思わず立ち止まり、あの人なのだろうかと思って振り返ってしまう。でも、顔を確認するまでもなくあの人香りとは少し違うのだ。

爽やかで、それでいて濃厚で甘く、いつまでも後にしつこく残る香り。

あの人から漂う、あの人だけの持つ香り。

似た香りを嗅ぐ度に、あの人を思い出す。そして、今はどこにいるのだろうか。元気にしているのだろうかと考える。

それは少し悲しくて寂しくなるけれど、どこか幸せな気持ちにもなるのだ。会えないこと。思い出せたこと。まだ覚えていること。

甘い記憶を運ぶ、甘い香り。

夏と言えば。向日葵。海。山。夏休み。西瓜。蝉。宿題。ラジオ体操。いろんなことを思い出す中で、一番印象的に思い出すのは雨の匂いだ。

もっと正確に言うなら、夕立に濡れたアスファルトの匂いだろうか。

突然青空に、線香花火のように散る白い雷鳴。やがて轟く音。突然降ってくる雨。ぽつぽつと地面が濡れたと思ったら、まさにばけつをひっくりかえしたかのような豪雨に見舞われる。ときには急に雨雲がやってきて真っ暗になる。ときには青空と太陽が見えているのに大量の雨が降り注いでくる。

アスファルトが濡れ、埃が浮き、流されていく。雨の匂いがする。草木や全てが濡れ、雨水の芳香を纏う。

雨宿りしながらそれを嗅ぐ。

夕立はいくらもしないうちに止み、今までの雨が嘘のように晴れ渡り、眩しいほど白く太陽が光る。その中を、歩いて帰る。あちらこちらに出来た水溜りにも青空がうつり、行く手には虹が出ている。

帰り道に漂ってくる晩御飯の匂い。焼き魚。味噌汁。炊きたてのご飯の甘い香り。それから、どこかの家から、これは蚊取り線香の匂い。

遅い夕暮れと、なぜだか郷愁を誘う物悲しい空気の中に、微かに火薬の匂い。誰かが軒先で花火をしているのだ。

そんなことを考えながら、すかせたお腹をかかえて家路を急ぐ。今日の晩御飯はなんだろうか、そういえば線香花火がまだ残っていたはず。晩御飯を食べたら青いバケツに水をためて、花火をしよう。

そんな子どもの頃の夏休みを思い出す、雨の匂い。濡れたアスファルトの匂い。

今でも、雨が降る夏の日には思い出す。夏休みの、子どもだった自分。不自由な自由さの中に日々を過ごしていた頃の自分を、懐かしく思い出すのだ。

東日本大震災。高校を出るまで北海道に住んでいた私にとって、南西沖地震以来久方ぶりに経験する大地震だった。発生当時は都内の会社で勤務中だった。夕刻、帰っても良いという指示が会社から出た。家の事情から、会社やその近辺で一夜を明かすという選択肢はなかった。家までは四十キロ程度。もしものときの為に運動靴は会社に置いてあったし、歩いて帰る道も頭に入れてあった。

会社から新宿まではそうでもなかったが、流石新宿駅近辺ともなるとすごい人。普段あれだけの通勤ラッシュを作り出している人数が軒並み歩いているのだから当然と言えば当然だ。新宿駅構内は混雑しており、座り込んでいる人も多数。今日中には動かないから出て行くようにと係の人が呼びかけている。公衆電話と公衆トイレには大行列。たまたま開催されていたセールで女性が運動靴を購入してその場ではきかえているのも見かけた。アルタ前で呆然と多くの人が画面に映し出されるニュースを見ていた。

新宿を出てしばらくは混雑でゆっくり歩くしかできないほどの人がいたが、数キロ進んだところで多少人が少なくなってきた。繁華街から過ぎて街の灯が少なくなると、励まされたのは商店の明かりだった。通常営業をしているスーパーやコンビニエンスストアの他、ホテルやオフィスビルでも明かりをつけたままにしてトイレを貸してくれていた。

驚いたのは、民家で「トイレどうぞ」と呼びかけてくれたり、紙に書いて壁に貼りつけてくれているところがあったことだ。自宅のガレージを開放し、事務机や椅子を並べて即席の休憩所にしてくれているところもあった。バナナや飲み物を置いてくれていた。

途中三度ほどコンビニエンスストアでトイレを借りたが、携帯の電池とお茶関係がどこも品薄になっており、配達もこず棚ががらがらのお店もあった。店内に事務室で使っていたであろうパイプ椅子を並べ、少しの間でも休めるよう配慮してくれていたところもある。

極限状況下こそ、人の本質が見えてくる。

勿論、歩いて帰る道すがら不快な思いもした。自分さえ良ければいいという態度の人、舌打ちをして周りに当たり散らしながら歩いている人、言い争いを始める人、駅員さんに詰め寄り怒鳴り散らす人。

だが世界で賞賛されたように、それでも多く人は常軌を逸せず、概ね冷静に行動した。国柄によっては暴動や略奪が起きかねないほどの未曾有の大惨事だったにも関わらず、首都東京では買物やトイレや公衆電話も、きちんと列を作って順番を待っていた。警察署の前では警察官の方々が沿道に並び、市民からの質問に答え道案内をされていた。ある私鉄では夜中になったものの、電車を稼働させ、それをパトカーがスピーカーで知らせながら町を周り、歩いて帰宅している人に伝えてくれた。電車は夜通し運行されたという。

色々と言われる“都会”ではあるが、困ったときには助けあう日本人の精神は、廃れて切っではないのだ。そこに浸け込む犯罪者もゼロではないとは言え、それでも日本の魂は残っている。

震災後、政治やマスコミなどに失望することばかりで、このままこの国はどうなってしまうのだろうと思うことも何度もある。だが、その度にあの夜損得勘定関係なく己の家を提供していた

一般家庭の人たち、おばあちゃんの笑顔を思い出し、きっとまだなんとかなるはずだと踏みとどまる。

早く震災前の、いやそれよりももっと昔の“古き良き日本”を取り戻せるよう、ひとりひとりが今迄何を見て何を見失ってきたのかを振り返るべきときなのだろう。そう思う。

積み重なる歴史

石畳の坂。教会。寺。眼下には海。連絡船。

函館山の麓、西部地区は、坂が多い。何の変哲もないアスファルトの坂もあれば、石畳の綺麗な坂もある。冬はソリで滑り降りたら楽しそうなので狭い急坂もあれば、ロードヒーティング完備の広い坂もある。

美しい石畳の坂で、街路樹が等間隔に生い茂り、見下ろした先に丁度煉瓦造りの建物と連絡船が見える景観の良さから、映画やドラマ、テレビCMなどの撮影でよく使われる坂もある。

小学生の頃。社会科の夏休みの宿題で、坂の名前を調べる、というのがあった。今でこそ観光客用に整備され、坂の名前と由来の書かれた立て札が大抵立っているが、その頃は古びて文字も読めない看板が立っているだけの坂や、それすら無い坂もあった。私たちは先生の作った簡単な地図を片手に坂を巡り、名前を調べては書き込んでいった。

八幡坂。大三坂。二十間坂。日和坂。基坂。幸坂。船見坂。坂を上って歩き回れば、そこここにある寺や神社。そして教会。

宗派の違う三つの教会に挟まれた位置に、細い小さな坂がある。小学生だった私たちには読むのが難しいような、漢字の坂ばかりだったのに、この坂だけは違った。

チャチャ登り

と片仮名で書いてあった。片仮名なだけに意味を予測することも難しく、私たちは興味津々になった。

宿題の答えあわせの授業で先生は、

「それはアイヌ語だよ」

と教えてくれた。

「アイヌ語で、老人のことをチャチャと言ったんだ。急な坂で、一生懸命登ろうとしてみんな老人のように背中が丸くなってしまうから、そういう名前がついたんだそうだよ」

私たちは、アイヌ語という自分たちとは違う言葉をひとつ覚えたことが嬉しくなり、はしゃいだ。すると先生は

「北海道は元々蝦夷地と言って、アイヌの人が住んでいた場所だったんだ。漢字が当てはめられているから気付かないだけで、アイヌの人が呼んでいた名前がそのまま知名になっているのは、他にもあるんだよ」

「たとえば？」

「地球岬や、長万部、倶知安、静狩なんかもそうだよ」

みんなは驚いていたが、転校生だった私はひとり納得した。北海道の地名は難しく、読み方がよくわからないことが多かった。当て字なら読み方が難しいのも当然だ。

「時間が流れて、変わっていくものも多いけれど、残っているものもたくさんあるんだ。日本がまだ鎖国をしていた頃、ペリーという人が来て港を開くように言われて、開かれた町のひとつがこの函館なんだよ」

だから寺や神社があり、そのすぐ隣に教会があり、アイヌ語の坂がある。異国情緒漂う町、と

表現されることの多い函館だが、その情緒はこの町に関わってきた人たちで作上げたもの。人々の暮らした時間そのものが、町に息づいているのだ。

「歴史がこの町を作っているんだ。そしてこの町の未来は、君たちが作っていくんだよ」

自分たちが生きて過去になった時間が積み上げられて歴史になることへの不思議さと、誇りを感じた日だった。

青空を見上げて

私は小さい頃から、いろんな動物を飼っていた。ペットが禁止だったマンションでも飼えそうな、鼠やひよこといった小動物だ。夜店で父が買ってくれた命だったせいか、どれだけ可愛かったつもりでも長生きはしてくれなかった。死んでしまう度別れが寂しかったが、幼い私は死というものを認識してはおらず、ただの別れくらいにしか思っていなかった。

初めて死というものの惨さを、今までそこに在ったものが、ただの肉塊になる恐ろしさを知ったのは、可愛がっていた野良犬が車に撥ねられるのを見たときだ。大人たちにスコップでゴミ袋に詰められてつれていかれるのをただ見ていた。

未だ、多分、幸いなことに、人の死に立ち会ったことは無い。身近な大切な人を突然死によって奪われるという、身を切られるような経験を私はしたことがない。その辛さは、想像するしかない。本当の意味ではきっと理解できないのだろうと思う。そんな私の友人たち何人かは、事故や病気で友達や恋人を失っている。ある日突然、今まで当たり前前にそこで笑っていた人がいなくなる。変わり果てた姿になってしまう。どれだけ辛い記憶なのだろう。

大切な君をおいて突然逝かなくてはいけなくなった君の大切な人の無念さ。その場にながら何もできなかった君の辛さ。

経験したことがない私には、想像するしかない。大切な人を失って、辛い気持ちはよくわかる。しかし、未だに辛そうにしている友人たちを見ている私も辛い。何もしてあげられない。私は君たちの大切な人ではないから。違う人だから。そう思い知る時の寂しさは、嫉妬にも似ている。

そして、少し思う。そこまで大切な人の心をこうして繋ぎ止めておけるのなら、死んでもいいかもしれない。死ぬのも、怖くないかもしれない。私がいなくなって、誰かひとりでもそうして私のことをいつまでも覚えていてくれるのなら。死ぬということは、ただ居場所を変えただけなのだ。人の胸の奥に。

綺麗事かもしれない。失った辛さはどうしても癒されることもなくて、ただただ辛くて取り消したい兎に角嫌だとしかいいないことで。会いたいのにもう二度と会えなくて。それでも、ずっと胸の奥で生き続ける。それは紛れも無い、永遠。忘れることがないから、未来永劫共に生き続ける。

私には手に入れられない永遠だ。

でもその分私は、友人たちの大切な人がもっていないものをなぜかまだもつことを許されて、ここにいる。永遠ではなくて、限りのある、いつまであるものなのかも、わからないものなのだが。私はそれをつかって、君の大切な人が君にしたかっただろう分も、君を大切にしよう。

会ったことも無い君の大切な人に。私は心から祈りたくなる。感謝と、安らかな眠りを。

会ったことは無いけれど、私の大切な人が大切に思っていた人だから。きっと素敵な人たちに違いないから。どこかできっと今も見ているだろうから。私は、私にできるやりかたで、あなたができない分、私があなたの大切な、それでも現世に残していつてしまった人たちを、大切にしよう。触れ合える身体をまだ持っていることを許されたのだから。温もりを感じて、伝えていた

いと思うのだ。

きっと何処かでそれを、笑ってみてくれているのではないだろうか。君の大切な人は、いつでも君を。だからこの世界は時々、こんなにも美しく見えるのではないだろうか。たとえば、この青空のように。触れそうなほど真っ白い雲と、それを照らす輝く光。そして絵具で塗りつぶしたような真っ青な空。

だから、泣いてもいいのだ。悲しいことなのだから、泣いたっていいのだ。しかし、泣いた後は一緒に笑おう。私は一緒にいるのだから。君の大切な人ではないけれど、それでも、いるのだから。だから共に笑っていきましょう。

それが、私の大切な人たちに私ができる、精一杯の ひとつの気持ちなのだ。